

# 高次脳機能障がい “ シナプス ” ニュースレター

第18号 (平成31年3月13日)

★高次脳機能障がいコーディネーター日より

## 『高次脳機能障がい』の研修会を開催しました。

平成31年2月、宮崎県身体障害者相談センター主催で「高次脳機能障がい」の研修会を開催しました。

講師は横浜市総合リハビリテーションセンター機能訓練課 臨床心理士の山口加代子先生をお招きしました。

高次脳機能障がいの基本的なことから具体的な症状や子どもから大人の障がいの方への支援、また家族への支援等、大変わかりやすく講義していただきました。

今回、その内容のポイントをお伝えします。

### 【高次脳機能障がい -理解と対応-】

講師：横浜市総合リハビリテーションセンター機能訓練課 臨床心理士  
山口 加代子 先生

#### ●高次脳機能障害とは

脳損傷後の記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などの認知障害に起因する日常生活、社会生活への適応が困難となる障害（行政的診断基準）。

原因は大きく分けて、病気（脳血管障害・脳炎・脳腫瘍・低酸素脳症など）と事故（交通事故・墜落・転倒・自殺未遂など）の二つです。

#### ●症状について

主な症状として、記憶障害（最近のことが思

い出せない等）、注意障害（注意が続かない、気付かない・間違える等）、社会的行動障害（感情コントロールの低下等）、遂行機能障害（段取りよく仕事ができない、自分のしたことに無頓着等）があり、調査（注1）によると、出現しやすいのは記憶障害90%、注意障害82%、遂行機能障害75%で、3つの障害が併存70%、また社会的行動障害に含まれる症状が一つ以上ある人が81%となっています。

また、症状の出方は百人百通りで、次のような症状もあります。

易疲労性（頭を使うと疲れやすい）、情報処理速度の低下（時間がかかる）、環境依存性（環境によってできたりできなかつたり）等もあります。

#### ●自己認識について

当事者本人は「前と違う」ことを認めたがらず、自分の状態に気づけないことも高次脳機能障害の症状です。また、気づくことで喪失感につながり、普通のこと普通でできていた自分はいなくなったと感じることもあります。

#### ●家族について

家族は、共に生活する大変さ、変化した家族関係の調整、以前と異なる本人を受け入れる大変さ、自分自身の精神衛生、生計維持への不安、将来への不安等、複数のストレスに襲われます。

## ●小児の場合について

原因は、実態調査（注2）によると、脳外傷が最も多く、次に脳血管疾患の順でした。発症年齢は6～12歳が多いです。

乳幼児期発症例では社会習慣やルールを獲得することができずに社会適応が難しくなることがあります。損傷の程度により、特定の技能が必要になるまで障害が表面化しないこともあり、生活年齢に伴い要求される課題が多く、複雑になるにつれ症状が顕在化しやすくなります。健常児と「一体感」がもてないこともあります。教育、就労状況では、研究（注3）によると、大学入学者の4分の1が中途退学、一般雇用の離職率15.5%に比べて、高次脳機能障がい者の離職率が50%と高い状況です。発症早期の診断や家族以外に相談者がいた方は離職が少ないですが、20歳以上で診断を受けた方は全員が離職を経験していました。

## ●大人の場合について

一緒に生活していると、当事者と家族にはそれぞれの思いに食い違いが見られます。例えば、当事者は、頼んでいるのにやってくれない、家族は私にやらせようとすると思いが違うことがあります。支援者は、当事者には、本人自身ができる方法を、家族には本人の行動変容をもたらすような関わり方への助言や家族自身の辛さ・大変さにも共感することが大切です。

## ●対応について

高次脳機能障がいのリハビリは、健康・生活リズムの安定→体力・耐久性→情緒的安定→機能訓練 代償手段・環境調整→納得できる生活へと段階を上がっていくことです。

記憶障害については、物の置き場所を決め、ラベルなど目印をつける等、覚えなくても目で確認できるようにし、確認する習慣を作ることが大切です。

注意障害については、当事者は複数のことに同時に注意を向けるのが困難なので、伝える際には「1度に1つ」を心がけ、伝わったかどうか確認しつつ伝えることが大切です。

社会的行動障害の感情・欲求のコントロールには、本人とルールを決めて、ルールや約束は必ず紙に書くこと等です。

支援者は本人・家族の思いに寄り添い一緒に考え、悩み、喜ぶ存在であることが大切です。また、自分の関わり方をモニタリング（表情：明るく・穏やかに）、（声の調子：はっきり・ゆっくり）、（声かけ：短く・わかりやすく）することも大切です。「だめ」の禁止の言葉よりも「～しましょう」とお勧めの語りかけ方やできたことを当事者とともに喜ぶこと、また当事者が家族以外の人と交流できる「つながる」場の提供等が大切です。

以上、山口先生のお話と資料からまとめさせていただきました。



- ・（注1）高次脳機能障害支援モデル事業 2004
- ・（注2）小児期発症の高次脳機能障害者の実態調査（H26実施）
- ・（注3）H26～28年度学童期・青年期にある高次脳機能障害者に対する総合的な支援に関する研究

### 問合せ先

高次脳機能障がい総合相談・支援拠点機関：宮崎県身体障害者相談センター  
担当 池袋 藤田 有川

住所 宮崎市霧島1丁目1番2号

電話 0985-29-2556 FAX 0985-31-3553

E-mail [shintaisogaiha-sodan-c@pref.miyazaki.lg.jp](mailto:shintaisogaiha-sodan-c@pref.miyazaki.lg.jp)